

作成者：中塚直人

2011.09.28

初めまして。今年度のフィンドレー大学福井県奨学生として、アメリカ合衆国オハイオ州のフィンドレー大学に留学させて頂いている中塚直人です。

貴重な留学の機会を与えて下さった福井県国際交流協会の皆様をはじめ、私の留学を支えて下さっている全ての方への感謝を忘れずに、アメリカで学んだことを自分の力として持ち帰り、福井県の国際交流の発展に役立てたいと考えています。私の報告書で少しでも多くの方がフィンドレーについて知り、この奨学制度や国際交流に興味を持って頂ければ嬉しく思います。

最初の報告書ですのでフィンドレーの紹介と大学での生活を中心に報告させていただきます。

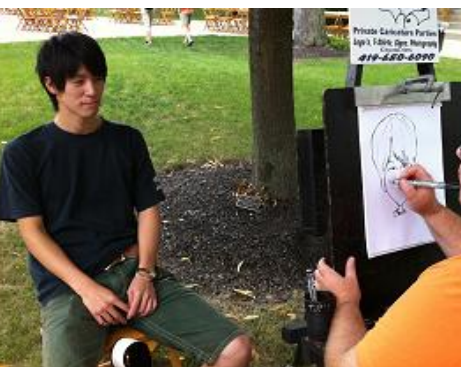
— フィンドレーについて —

私が留学しているフィンドレー市はアメリカ合衆国・オハイオ州の北西部に位置する人口約4万人の街です。福井県に似た友好的で静かな街という印象を受けました。1880年代に石油と天然ガスの産出によってフィンドレー市が栄えたことから、現在でも大学や街の至る所で石油のマークやシンボルが掲げられています。フィンドレー市の中心地・ダウントウンから約1キロ離れたところに、私の通うフィンドレー大学があります。緑豊かなキャンパスにレンガ色の建物が良く映え、8、9月は天気も良くとても気持ちよく過ごすことができました。



— ライフスタイルについて —

私は大学のキャンパス内にある寮で、東京の日本人学生とルームシェアをしています。寮にキッチン



は無いのですが、学内にあるダイニングホールを利用できます。また学内にはカフェテリアやスクールショップもあるので、普段の生活に必要なものは学内で手に入れる事ができ、不自由なく普段の生活を送ることができます。図書館やパソコン室はもちろん、体育館やビリヤード・卓球・バスケット、バレーコートなども無料で利用できます。

授業以外の時間には宿題やクラブ活動はもちろん、留学生や学生と話をしたりスポーツや買い物・外食をしたりして楽しく過ごしています。

— 授業について —

フィンドレー大学の留学生は大きく分けて「IELP-集中英語コース」と「Undergraduate-学部」のどちらかの授業を受けます。IELPではアメリカの大学で学ぶのに必要な英語力と、レポートの書き方などのスキルを他国の留学生と一緒に学びます。Undergraduateではネイティブの学生にまじり、学部の

授業をとります。

私は思い切って学部授業に挑戦しましたが、日本の大学との大きな違いに苦労し忙しい毎日を送っています。アメリカの学生の「興味を持って自分のために勉強する」という熱意や、多くの授業で常に意見と自己主張を求められる授業スタイルに圧倒されました。「アメリカは自己主張の強い国」と腹をくくって挑んだ授業でしたが、謙遜の国から来た私には大きなカルチャーショックとなりました。1ヶ月が過ぎた今、少しずつ発表や意見を言うことができるようになってきました。この調子でよりたくさんのかを自分の力にできればと思います。



— 1ヶ月を過ぎて —

こちらでの生活も1ヶ月を過ぎましたが、毎日多くのことを学ぶことができます。授業において留学生は特別な存在ではないため、疑問や不安なことは自分から主張しなければなりません。自分の甘えに向き合う場面もあれば、アメリカ人や様々な国からの留学生と話し、たくさんの考えを共有する中で自分自身の視野が広がったように感じる瞬間もありました。また日本各地から来ている日本人学生からもたくさんの刺激を受けています。様々な文化が共存するアメリカだからこそ、単に英語の勉強だけでなく、自分の視野と世界を大きく広げることに挑戦したいです。

10月からは学校訪問やボランティア活動などが予定されているので、そうした活動について報告しようと考えています。

2011.10.31

フィンドレーでの生活も3カ月が経とうとしています。10月は留学生としてのたくさんの活動が始まった為に大変忙しいひと月になりました。今月の報告書では、私が体験した子どもと触れ合う活動、ボランティア活動、貴重な経験となった行事について報告させていただきます。

— 子どもたちとの触れ合い「元気キッズ」「Homework Central」 —

フィンドレー大学の日本語プログラムが企画する「Genki Kids（元気キッズ）」の活動が始まりました。元気キッズとは6歳から12歳の児童が週に1～2回、放課後にフィンドレー大学をおとずれ、日本語のフレーズや日本の文化的・伝統的なものについて学ぶ教室です。

私は日本で教育実習を経験していたので楽な気持ちで挑みましたが、アメリカの子どもたちのエネルギーに終止圧倒されることになりました。なんとか活動は終えましたが、日本よりも自分の考えを必死で伝えようと、人見知りすることなく話す子どもが多い印象を受けました。

また授業の一環で、Homework Central という放課後に児童が通う施設でも日本についての活動を行いました。Homework Central は地域の教会内に設けられており、30人ほどの児童が宿題をしながら保護者が仕事を終えるのを待っています。フィンドレーには毎年多くの日本人留学生在が訪れ、子どもたちと交流する機会があるため、児童の中には日本や折り紙について詳しく知っている児童もいました。日本企業や日本人労働者が多いオハイオ州だからこそ、こうした活動を通して地域の人に日本への理解を深めてもらうことが大切であり、今後も続ける必要があると感じました。



— ボランティア活動 Mobile Food Pantry —

Food Pantry（フードパントリー）というボランティアに参加してきました。フードパントリーとは食糧を無料でホームレスの方や低所得層の方に配布するボランティア活動を指します。フードバンクという慈善団体が食品製造会社や小売業者から食糧の寄付を受け、（この食糧には、包装の小さな傷や賞味期限の為に「お店では売れない商品」も含まれるそうです。）その食糧をボランティアの手で配布するため、無料で活動ができるようです。余談ですが、日本のフードバンクは「食べ物がもったいない」という意味合いが強いのにに対し、アメリカや世界のフードバンクでは「生活困窮者を助ける」という姿勢が強いといった違いも見られるそうです。

活動後にアメリカ人の友人が「どんな貧しそうに見える人でも、笑顔で『ありがとう』と言ってくれた。僕もつられて笑顔になるほどの笑顔だった。人間の『豊かさ』の基準について考えさせられた。」と感想を言っていました。経済学の授業で習った「GDP だけでは、本当の豊かさは測れない。」ということ強く体感しました。教科書だけでなく実体験を通して学ぶ機会が、アメリカでの大学には多いように感じました。

— レセプション “Arigato, Ohio!” —

在デトロイト日本領事館とダブリン市が主催する Arigato, Ohio! というレセプションに参加させていただきました。オハイオ州と日本は経済的に強く結び付いており、特に自動車関連の日本の会社や工場が多く、地域内の雇用において大きな役割を担っているそうです。そこで在デトロイト日本国総領事館の松田邦紀総領事とお話しする機会をいただきました。なんと松田総領事は福井県の出身だそうで、「日本人留学生として日本とアメリカを繋ぐことはもちろん、福井県の代表としてオハイオ州やフィンドレーを福井県と繋げることも大切。福井県に住んでいるのだからこそ、福井にアメリカで得たものを持ち帰ればいい。それはきっと他の県には無いものになる。」とのお言葉をいただきました。福井県の奨学生としてアメリカで何を学び、どんなものを福井県へ還元すべきか、より深く考えさせられる機会となりました。レセプションの会場には日本企業の社長や日本政府観光局、自治体国際化協会(JET プログラムなどを運営)の職員の方もいらしており、日本とアメリカ・オハイオの経済・観光・教育の繋がりについて知ることができました。特に観光局の方が東北地方の復興の様子や観光について詳しく説明しており、日本の国外で復興支援のひとつを見たことが強く印象に残りました。添付した写真は松田総領事、竹内みどり首席領事、フィンドレー大学の川村宏明准教授と一緒に撮影して頂いたものです。



川村宏明准教授、松田邦紀総領事、竹内みどり首席領事と

— Rakugo 英語落語 —

フィンドレー大学の日本語プログラムで英語落語に挑戦しました。落語家の笑人(しょうと)さんにゲストティーチャーとしてお越しいただきました。笑人さんは英語教師の経験もあり現在も小学生に英語や英語落語を教える活動に取り組む傍ら、「英語落語は世界の人々の、心の壁を取り除くことができる」との思いのもと、日本国内やアメリカ、ニュージーランドなどで英語落語の口演・体験レッスンを行っている方です。とても気さくで小学生への英語教育や英語落語の発展へのエネルギーに満ち溢れた方でした。アメリカ人の学生は初めて耳にする関西弁に興味津々のようでした。

この日はアメリカ人の学生は日本語での落語を、私たち日本人留学生は英語落語に挑戦しました。どの学生も初めは皆の前で大きな声を出すことや、落語独特の動作に慣れず苦戦しているようですが、次第にどの学生も「もっと笑わせたい」と言わんばかりに上達していきました。二日目の発表会では多くの学生がなんとか発表を終え、満足した様子でした。

私も最初は「落語でアメリカ人を笑わせるなんて、ましてや英語で落語をするなんて難しそうだ」と感じていましたが、英語落語で使う英語はとてもシンプルで日本人にも優しいもので、動作を中心とした分かりやすい「笑い」のポイントはアメリカ人にも馴染みやすいようでした。今回の英語落語体験は伝統芸能とはあまり縁のない生活をしてきた私にとって、初めての日本の伝統芸能に挑戦する機会となりました。福井県は女流落語の発展にも力を入れています。日本文化を楽しみながら体験してもらえる英語落語を今後も練習し、様々な国の人々に日本文化・福井県について知ってもらいたいと思います。12月にもう一度英語落語を披露する機会をいただけるようなので、練習に励みたいと思います。



地域の学校で口演を行う笑人さん



— Fall Break 秋休み —

10月8日から11日までの秋休みを利用してシカゴに行ってきました。私にとって初めてのアメリカの都市でした。様々な立場・人種の人が同じ街で時間を過ごす様子を見ると、改めて自分がアメリカにいることを実感しました。



11月にフィンドレー大学の学長ご夫妻と理事長が福井県を訪問される際に披露する、フィンドレー大学を紹介するビデオレターの作成に取り掛かりました。慣れない仕事に四苦八苦していますが一生懸命レポートさせていただきます。

4カ月をアメリカで過ごし、フィンドレーの生活にも慣れ、留学生活への不安や新しい刺激はほとんどなくなりました。留学生活では「渡航直後の全てが新鮮に感じられる時期を過ぎると、刺激にも慣れてしまい、孤独や不安な気持ちに悩まされる時期が来る」と言われています。11月は多くの学生がホームシックを感じたり、自分の留学に不安を感じたりしたようです。私もそのうちの一人でしたが、自分の留学生活としっかりと向き合う良い機会となりました。11月の月例報告では Thanks Giving Break、子どもたちとの活動、博物館の見学を通して感じたことを中心にレポートさせていただきます。

— Thanksgiving Break —

アメリカでは11月の第4木曜日は Thanksgiving Day として休日になっています。Thanksgiving は、1600年代にイギリスからアメリカへ移住した人々が、先住民の助けを借りて冬を越すことができ、感謝祭に先住民を招待したことから始まったと言われています。Thanksgiving Day に合わせて11月23日から5日間、Thanksgiving Holiday として授業がなかったので、ホームステイをさせていただきました。彼女は昨年度福井に留学していたフィンドレーの学生です。

ホームステイでは伝統的な七面鳥やパンプキンパイなどの料理を頂いたほか、ピルグリムやターキーの絵を描き部屋を飾ったり、市内を案内していただいたりしました。友人の家族や親戚といろいろな会話やゲームを楽しみ、アメリカらしい休日の過ごし方ができたように思います。突然尋ねた私たちを温かく迎えていただき、感謝の思いでいっぱいでした。そのアメリカ人の友人は再び日本へ戻って勉強を続けることが決まっています。フィンドレー大学と福井県の奨学制度をきっかけに、交流の輪が広がっていることに感動しました。貴重な機会を十二分に活かさなければいけないと再確認した休日となりました。



— 子どもたちとの活動 “Genki Kids” “Funday Sunday” —

11月はフィンドレーの子どもたちと関わる機会がたくさんありました。先月紹介した「元気キッズ」では今期のまとめの活動が行われました。”Family Night”として子どもたちの家族にむけてこれまで元気キッズの活動で学んだ日本語や歌やゲームなどの活動を発表しました。たくさんの保護者が見守るなか緊張した面持ちで日本語を披露する子どもたちでしたが、上手く発表できたあとはどの子も満足そうな笑顔を浮かべていました。短い時間でしたが異文化交流の楽しさを感じてもらえたことを願います。活動に参加した子どもたちの中に、将来日本語を専攻し日本に留学する子がいるかもしれないと思い、何年後かの子どもたちに会ってみたいとも感じました。

フィンドレー大学にあるマザーミュージアムでは毎月”Funday Sunday”というイベントが行われます。フィンドレー大学の学生や職員が月ごとのテーマに沿って準備した、いくつかの工作やアクティビティーに、地域の子どもたちが自由に取り組むイベントです。フィンドレー大学の日本語プログラムでは毎月ジャパンプースを準備し、学生たちが考えた工作を子どもたちに挑戦してもらっています。11月は私と日本人学生、アメリカ人学生で「はらぺこあおむし」のテーマで活動を準備しました。「小さな子どもと話すだけなら、英語も簡単なものだろう」と予想していましたが、子どもたちは相手が日本人ということもあり緊張しているようで、普段の英語では通じず不安な顔をされることがたくさんありました。自分が慣れた環境だけでなく、常に新しい挑戦や刺激を求めて勉強する姿勢が必要だと考えさせられました。留学の初めにフィンドレーの教授から「Out of Comfort Zone」という表現を習ったことを思い出しました。



Funday Sunday にて。英語の正しい発音を教えてもらっているところです。



ひらがなをなぞってもらいました。

—Underground Railroad Museum and Holocaust Museum —

フィンドレー大学の異文化理解のプログラムで週末に市街の博物館を見学しに行くことができました。シンシナティにある National Underground Railroad Freedom Center は、Underground Railroad（地下鉄道）の博物館です。地下鉄道は1800年代に奴隷制に反対する人々が、黒人奴隷を奴隷制のないアメリカ北部・カナダへ逃れる手助けをした組織や逃亡路のことをいいます。実際に地下道があったわけではなく、「隠れながら・人目につかない」という意味から地下鉄道と呼ばれるようになったそうです。日本での留学経験のある黒人の先生が「この博物館は僕たちにとって、日本の原爆ドームのようなもの

だと思う。」と言っていたのが強く印象に残っています。

ミシガンにある The Holocaust Memorial Center では、大量虐殺に至った時代背景や当時の資料を見ることができました。特にショッキングだったのが、当時の強制収容所の映像が流されていたことです。同じ人間同士がその容姿やバックグラウンドの違いから、優劣のあるのが当たり前のように扱われる様子は非常に衝撃の強いものでした。

フィンドレー大学の紹介ビデオの原稿を考える際、私が「日本では異文化に触れることが少ない」という意味で「同じ民族しかいない国」と表現したところ、先生から「日本で暮らす少数民族を無視しているようにも取られてしまうよ」と指摘を頂きました。自分と同じバックグラウンドを持つ人の中だけで育った自分が、いかに異文化について理解していないかを痛感させられました。日本で暮らす外国人の数は年々増えていると言われています。日本での普段の生活において、異文化や民族の違いについて考える機会が少ないのも事実です。異文化や自分たちと異なるバックグラウンドに対して、理解があり寛容な日本人であるためにも、異文化への意識を日ごろから高めておく必要があると感じました。



Railroad ミュージアム。ツアーだったので丁寧に解説までしていただきました。

秋学期も残り一カ月をきり、ネイティブが話す英語も少しずつ聞き取れるようになってきました。自分の英語が上達していることを実感しています。しかしまだ授業に十分に理解することは難しく、一生懸命準備したプレゼンテーションが上手くいかずに悔しい思いもしました。学期末のテストが終われば留学も半分が終わってしまいます。留学という貴重な時間を十分に活かせるように、自分の判断でしっかりとものごとの取捨選択をしていきたいと思います。



ホロコーストミュージアム。こちらもツアーとして案内していただきました。



スヌーピーも登場するジョークが盛り込まれたプレゼンテーション。
秋学期もいよいよ学期末テストの時期です。

2011-2012 フィンドレー大学・福井県奨学生 月例報告書 12月分

作成者：中塚直人

2012.1.12

新年明けましておめでとうございます。楽しい時間は速く過ぎるもので奨学生としての生活も、半分が過ぎてしまいました。後半の留学生活も努力を重ねたいと思います。12月は秋学期の授業も終わりを迎え、辛い学期末テストと楽しい冬休みを満喫することができました。学期末試験と冬休み、地元紙の取材について報告させていただきます。

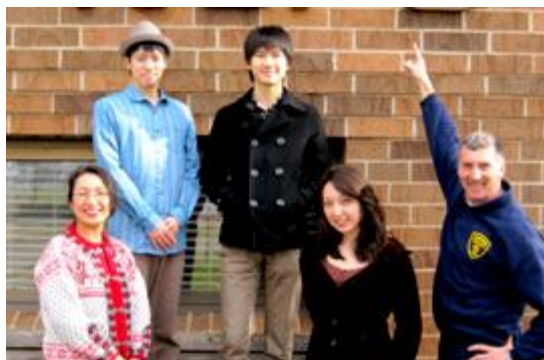
— Final Exam —

大変だった秋学期の授業も12月中旬で終わりを迎えました。全ての授業で最終課題や試験が課された為、大変忙しくなりました。学生寮には「午後7時から8時以外の時間帯は寮全体を静かに保つこと」といった案内のポスターも貼られ、図書館や学内のオープンスペースでも課題や試験対策に、一生懸命取り組む学生の姿がたくさん見られました。普段はあまり勉強している姿を見せない友人も、夜遅くまで勉強していました。彼が言うには「奨学金やローンなどを使って自分で学費を払っている学生が多いため、少しでもいい成績を残す為に、必死で勉強する学生が多い」とのことでした。授業や自身の学びに対して熱心な学生が多いように感じました。

こちらの大学では成績の評価規準が、学期の初めにシラバスの中ではっきりと明示されます。例えばスペイン語の授業では、「出席10%、クイズ5%、宿題10%、チャプター毎のテスト計35%、会話・作文テスト各10%、最終試験20%」といったように、細かく規定されていました。私が取った授業には「暗記や試験の結果だけで評価される授業」はありませんでした。学生としての授業への姿勢と総合的な能力で平等に評価されるように工夫されているようです。奨学金の多様さに加え、誰でも利用できるチューターや勉強会なども準備されており、全ての人が等しく、十分に勉強ができる機会が整えられているように感じました。

— Winter Brake —

辛い最終試験が終われば3週間の楽しい冬休みがやってきます。学生たちは試験が終わると同時に次々と帰省していきました。私は日系企業で働く日本人の友人の家と、フィンドレーで知り合ったアメリカ人の友人の家にホームステイをさせていただきました。アメリカのクリスマスは家族と過ごすのが一般的です。親戚で集まってパーティーをすることも多いので、たくさんの人と出会い、日本とオハイオ州の関係やホームステイをした地域のことなど、様々な話をすることができました。自分が英語を勉強する理由や、英語で子どもたちに何を伝えたいのかを考えなおすきっかけにもなりました。たくさんのことを勉強できた、充実した冬休みとなりました。



フィンドレーから車で3時間ほどの所にある Canton という街でホームステイをしました。街の中心部のダウンタウンで行われた **First Friday** というイベントがおもしろいものでした。アートギャラリーやバンド演奏、ストリートパフォーマーなどを見てまわることができました。聞いた話では郊外にできた大きなショッピングモールなどの影響で、ダウンタウンに来る人が減ったことをうけ、地元の芸術作家が中心となりダウンタウンを盛り上げようと開催されているイベントだそうです。月に一度だけのイベントだそうで、古い劇場でも映画を無料で上映していました。道いっぱいの人がバンドやパフォーマンスのステージを見ていたり、通りに並ぶアートギャラリーではアーティストが自分の作品を展示販売したりしていました。普段のダウンタウンの様子からは想像もできないほど、たくさんの人で盛り上がりを見せていました。



アートギャラリーのうちの一つで、和風の焼き物の作品を展示しているアーティストに出会いました。**Monica** というアーティストは中国に留学経験があり、そこで目にした焼き物に刺激を受け、焼き物をベースとした作品を作っているそうです。日本の湯飲みのような作品もありました。まさかアメリカの小さな街で焼き物や湯飲みと出会うとは予想もしておらず大変驚きました。**Monica** は留学生の私に合わせてゆっくりと分かりやすく話してくれました。留学経験から外国人と上手くコミュニケーションを取る方法も学んだそうです。留学から多くのことを学び自分の生活にそれを活かしている **Monica** に良い刺激をもらいました。

— 秋学期の降り返り・春学期にむけて —

フィンドレー大学での秋学期の授業は私にとって、初めての外国での単位を目的とした授業でした。アメリカに到着してすぐに授業が始まり、分からないこと慣れないことばかりで大変な思いをしました。教科書の買い方でさえ分からずに苦労したことも今では笑い話です。ある授業ではクラスの中で私だけが留学生でした。また自分の視野を広げようと勉強したことがないような授業も取ったので背景知識がなく、言葉の違いも内容を理解するのに大きな障害になりました。そんな私でしたが学期の終わりにはなんとか、「現地の学生と同じように勉強する留学生」になれたように思います。つたない英語のプレゼンテーションでも、一生懸命に耳をかたむけてくれた学生と教授の姿が強く印象に残っています。教授や学生にたくさんサポートしていただいたおかげで、秋学期の授業を無事に終えることができたと思います。

春学期では **TESOL**、スペイン語、心理学など言語教育の助けになるような授業に加え、スペイン語やダンスといったアメリカらしい授業も履修します。秋学期に引き続き、アメリカの学校への訪問や、日本・福井についてプレゼンテーションなどの活動も続ける予定です。秋学期は授業がメインの留学生活だったので、春学期では授業以外での経験もたくさんできればと期待しています。

ー フィンドレーの新聞「The Courier」に載りました ー

フィンドレーと福井県の関係についてフィンドレー市の地元紙「The Courier」に取材を受け、1月9日付の新聞に掲載していただきました。記事の中では「フィンドレー大学福井県奨学制度と福井大学・フィンドレー大学間での交換留学制度について」「11月のフィンドレー大学関係者の福井県訪問」「日米留学生の留学経験」について紹介されています。新聞を見たという教授もあり、福井県とフィンドレーの関係について広くアピールできたことを嬉しく感じました。



←「毎年お互いの地域・学校へ両国の学生が留学しているため、学生が留学先に友達がいる状態で留学を始められます。福井県とフィンドレーの間で留学での経験や知識、思い出などを共有し、お互いにサポートし高め合える良い関係の下で勉強ができます。」ー福井県に留学したアメリカ人学生



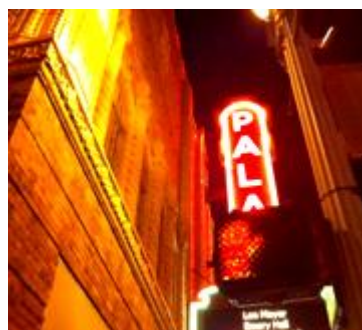
私が知る限りでもフィンドレー大学は、福井県、埼玉県、福井大学、静岡県、東京、北海道の私立大学、日本の学校グループとの協定・提携を結んでおり、これまでも留学生と地域の学生や人々との交流が盛んだったようです。日本人留学生の中には高校のプログラムでフィンドレー大学を訪問、高校を卒業後フィンドレー大学に進学した学生もいます。その学生はフィンドレーに住む日本人の紹介で地域のご夫婦に知り合い、今では親しみを込めて「American Parents」と呼ぶほど親しい関係になったそうです。

私たち日本人留学生はアメリカや日本の多くの人に支えていただき、有意義な経験、日本ではできないような経験ができています。フィンドレーに留学に来て、熱心なサポートをしてくださる教授・学生や、私たち留学生にまるで本当の家族の様に接してくださる地域の方に出会いました。これらは現在留学



↑台湾からの留学生とも仲良くなり、一緒に勉強しています。

している学生だけの力ではなく、これまでにフィンドレーや周辺の地域で友好関係を築いてきた人々の努力の結晶のように感じました。現在の環境を築いてくださった方々や、オハイオ州・フィンドレーの人々、日本から私たち留学生を支えてくださっている方々への感謝の気持ちを忘れずに、春学期では自分からより多くのことに挑戦し、より深くたくさんのかことを学べたらと考えています。



1月の2週目から春学期が始まりました。アメリカの大学のスタイルにも慣れ、今学期は順調なスタートを切ることができたように感じます。今学期はライティング、スペイン語、心理学、英語教育、ダンスの授業を履修します。秋学期よりも時間に余裕がある履修なので、授業以外の活動にも積極的に参加できればと思っています。

— Martin Luther King Jr. Day —

アメリカでは1月の第3日曜日は"Martin Luther King, Jr. Day"として祝日となっています。「私には夢がある」のスピーチで有名なマーティン・ルーサー・キング・ジュニアの人種差別への反対活動を称え、祝日に制定されたそうです。この祝日に合わせていくつものイベントがフィンドレーで開かれました。15日の夜にはフィンドレー市内の教会で異文化や多様性について考える式典が開かれ、教会までの道を参加者でねり歩きました。そこで黒人のおじいさんと話をすることができました。「差別の対象だった黒人も平等に暮らすことができる世の中になった。黒人初の大統領も生まれた。ルーサーキングが成し遂げたことは偉大だ。この祝日は私にとっても大きな意味があるし、それをたくさんの人に

知ってもらいたい。」 白い息を吐きながら嬉しそうに語る笑顔が印象的でした。

次の日には地元の高校生がフィンドレー大学を訪れ、私たち留学生と国際理解・異文化交流を目的に交流しました。日本の文化や生活について話し合った後、一緒に折り紙を折って交流しました。アメリカ国内でも地方によっては異文化や外国人とコミュニケーションをとる機会が少ないそうで、「外国の人と話すことに慣れていない」という高校生もいました。



これまでは自分が異文化交流の機会に参加する立場でしたが、今回の活動は自分が「異文化交流を発信する側」に立つもので、私にとって新しい経験でした。アメリカに来てから黒人や日系人への差別について勉強する機会がたくさんありました。差別について知れば知るほど、異文化理解や交流が持つ意味と、その重要性について考えさせられました。今回の交流でアメリカの若い世代の人たちと、異文化について考える交流ができたことを嬉しく思いました。また英語が持つ力についても改めて考える機会になり、もっとたくさんの日本人に、英語でコミュニケーションができるようになってほしいという気持ちが強くなりました。



ルーサーキングの式典にて。



交流活動にてサウジアラビアのダンスを踊る高校生。

ー 日本語プログラムパーティー・福井県プレゼンテーション ー

毎月開かれる日本語プログラムのパーティーで、福井県についてのプレゼンテーションを行いました。私と福井大学の交換留学プログラムで来ている2人の学生、福井県に留学経験のあるフィンドレーの学生2人の5人でプレゼンを行いました。福井県の行政、地理や福井県とフィンドレー間の留学プログラムについても詳しく説明できる機会となりました。

フィンドレーの学生が自分の先輩が福井に留学している写真に喜ぶ姿を見ると、福井県とフィンドレーが持つ繋がりやの強さを再確認させられました。福井大学に教育学部があることもあって、日本語専攻や言語教育に興味を持つフィンドレーの学生が興味を示してくれましたようです。「福井に留学するのが楽しになった」「福井に行ってみたくなった」と言う学生も何人もおり、福井県について上手くプレゼンテーションができたように感じました。



ー 様々な交流活動 ー

1月下旬から3週間、韓国の教育大学の学生9人がフィンドレー大学を訪問しています。私たちがお世話になっている教授が彼らのサポートをしており、彼らの専攻が私と同じ教育学であることもあって、すぐに仲良くなることができました。お互いの国の英語教育について話し合ったり、フードパントリーと一緒に参加したりしました。彼らの滞在は2月の中旬までの短いものですが、それまでに積極的に交流しお互いの情報を共有したいと考えています。

私が福井県でお世話になっていた小学校の提案で、小学校の課外活動のひとつとして、テレビ電話を使って英語の交流をする機会をいただきました。フィンドレー大学で日本語を勉強している学生2人にも手伝ってもらい、県内の小学校と英語を使って交流を行いました。初めての取り組みで課題も残りましたが、子どもたちも楽しそうに交流しており、学生2人にとってもいい経験となったようです。今後のフィンドレーと福井県との、新たな交流のきっかけとなれればと願っています。

2月からは授業以外の活動がたくさん始まります。地元の高校への訪問や、地域の福祉施設でのボランティア活動、地域の方と会話をするカンパセーションパートナーなどの活動が予定されています。フィンドレー大学以外の人と交流する機会は貴重なので、しっかりと準備しこれらの機会を有意義に活かし、多くの人に日本や福井について知ってもらいたいと考えています。

留学も半年が過ぎ、フィンドレーでは冬の寒さも和らいできました。2月は大学での行事やイベントにはあまり参加できませんでしたが、日本人留学生としての交流活動をたくさん経験させていただきました。今月の報告書ではそれらの活動について報告させていただきます。

一 国際理解のための交流、日本人留学生として 一

フィンドレーでお世話になっている教授や知り合いの方から「大学の授業や地域の高校で日本の文化について紹介してくれないか」と、二つの交流の機会をいただきました。大学の異文化理解の授業にパネリストの一人として参加し、日本の信仰について紹介するものと、高校の家庭科の授業を訪問し日本の結婚についてプレゼンテーションをさせていただくものです。また3月にも中学校を訪問し日本を紹介する活動をさせていただくことになりました。



↑訪問した地域の高校

私は福井県や奨学制度についてのプレゼンテーションは経験があったのですが、日本のことを紹介するのは初めての経験でした。「留学にいくと、自分が母国についていかに無知であるかを気付かされる」と言われていますが、僕もその通りでした。恥ずかしながら日本の宗教についても、日本の結婚の伝統についても全くの無知で、話す内容を一から調べることになりました。日本で暮らしたことがあるアメリカ人の教授からも、日本の宗教について教えていただきました。ある調査によると、日本の若者の大多数は特定の宗教を信じておらず、他国と比べても日本人の宗教に対する意識は独特なものだそうです。

授業と高校訪問の両方で、「インターネットで見つけられる情報だけでなく、実際の日本人の感覚も伝えてほしい」と言われていました。そこで「アメリカ人の教授に教えてもらうまで、日本の宗教についてあまり知らなかった。」「若い人の多くは特定の宗教を持っていないと言われているが、宗教由来の通念行事や『たくさんの神様がいる』などの仏教・神道的な考え方は根付いている。」「日本ではキリスト教を真似たウェディングが人気で最近では定着している。」といったことを発表しました。学生も高校の生徒たちも日本の文化について聞くのは初めてだったようで、「忍者や寿司、オタクの国」というイメージとのギャップに驚き、楽しんで聞いてもらえたようです。

日本の伝統的な文化にあまり触れることなく育ってきた私は「自分にはあまり愛国心のようなものは無いな」と感じていました。しかしアメリカでこうしたプレゼンテーションをするうちに「もっと日本について知ってもらいたい。」「できれば日本に来て、たくさんのものを見てほしい」といった気持ちも生まれました。

これまでの活動と違って、2月の活動は自分から進んで参加してものではなく、教授や職員の方に指名していただいて経験できた活動でした。フィンドレーに来た当時は右も左も分からずに毎日の英語に必死だった私が、半年をかけてたくさんの人と知り合うことで、やっと「フィンドレーの学生」の一員になれたような気がしました。留学生としてのこれまでの取り組みや活動が、こうした形で評価されたように感じました。プレゼンテーションを終えた達成感や充実感と共に、自分の留学がやっと形になってきたことも、とても嬉しく感じました。

ー 地域の人々との交流 ー

今月は地域の人々と交流する機会もたくさんいただきました **Conversation Partner** という地域の方とパートナーとなって月に何度か会話をする活動と、**Communication Ambassador** という、週に一度フィンドレー内の施設を訪問しボランティアをする活動です。またフィンドレーに住むご夫婦のご自宅を訪問する機会もいただきました。アメリカ人の中でも留学生と話す機会が少ない方と会話することは、留学生に慣れている人々と話すことよりも難しく、とても勉強になります。「この部分が上手く言えないな」と思いながら話した部分が、案の定うまく伝わらず、言い換えや発音を直すことになります。時間もかかり恥ずかしい思いもしますが、「言えなかったことが、少しでも伝えられるようになった」といった成長を感じることができました。これらの活動はまだ始まったばかりで活動回数も少ないですが、帰国まで続けることができます。積極的に活動に取り組み、たくさんの種類の英語に触れたいと考えています。

フィンドレーに来た頃は日常会話はおろか、自分の言いたいことも上手く言えなかった私ですが、今ではこうして会話を中心とした活動に取り組むことができている。英語に慣れ、使うことができる表現や単語が増えたのだと実感することができました。もちろん授業など難しい会話では苦勞する場面がたくさんありますが、留学の目標のひとつである **TOEIC** のためにも、現状に満足せず引き続き英語の勉強も続けていきたいと思っています。



↑城のようなデザインで統一された小学校



↑電子黒板

Conversation Partner の活動で地元の小学校を案内していただきました。どの教室もカラフルで、様々なものが置いてあり、日本人の私にとって、教室というよりも「誰かの部屋」のような雰囲気を感じました。中でも特に驚いたのが電子黒板です（写真右）。パソコンと画面を共有し、電子黒板自体に手を触れて操作することもできます。読み物や **You tube** の教材を映し出し、電子マーカーで自由に画面に書きこむこともできました。学校を楽しく過ごしやすい場所にするために、教育現場であっても楽しさや面白さを取り入れる工夫をしているそうです。今後も学校訪問をさせていただく機会があります。アメリカの学校を訪問した際には、日本の学校でも取り入れられる点がないか観察してみようと思います。



ダンスパーティーにて。人気投票をしていました。



バレンタインデー。フィンドレーの留学生についての記事が新聞に載っていました。



— 多くの学生と関わるなかで—

私の留学も終わりに近づいていることもあり、今回の留学を振り返ることが多くなってきました。この留学の間に、もちろんアメリカや英語の勉強はたくさんさせていただきました。加えて、出身や立場の異なる学生と交流する中で、自分には無い考え方や価値観を知ることができました。こうした経験は留学にくる前に予想していたものではなく、留学の中で徐々に気付いたものでした。他の日本人留学生とは考え方・価値観の違いが原因で、各国からの留学生とは言葉の壁や英語力の差が原因となって、うまくコミュニケーションが取れずぶつかってしまうこともありましたが、同時に自分自身の弱い部分と向き合う機会にもなりました。人間的にも成長できるチャンスもたくさん経験しました。

日本にいた頃にも「なるべく視野を広く保つこと」を心がけていたつもりでした。しかしどうしても同じ場所で新しく学び続けることは難しいようで、自分でも気がつかないうちに狭い世界に閉じこもってしまっていたようです。改めて「違う世界に出ること・新しい環境に踏みこむこと」が与えてくれる大切さ、良い影響を実感しています。留学の初めにフィンドレーの教授に助言していただいた”Out of Comfort Zone（自ら快適な環境から歩み出ること）”をなんとか実践できたように思います。フィンドレーは私にとって新しい世界であり、慣れない環境ですが、留学前の快適な生活を続けていた私には到底できなかったであろう経験や勉強をすることができました。留学がこういったものか、”Out of Comfort Zone”という言葉を通して自分の中で整理ができたように思います。

残りの日数もいよいよ数えるほどになってきました。有終の美を飾ることができるよう、努力したいと思います。



3月初旬のスプリングブレイクに台湾人の友人たちとシアトルとサンフランシスコ、ヨセミテ国立公園へ旅行に行きました。チャイナタウンやアジア料理のレストランにも連れて行ってもらい、ユニークな体験をすることができました。

フィンドレーも少しずつ暖くなり、緑も目立つようになってきました。いよいよ留学もまとめの時期に入り、どの学生も留学生も忙しく毎日を過ごしています。3月は日本とオハイオ州との関係についてたくさん勉強する機会をいただきました。経済的な交流はもちろん、教育や文化的な交流も行われており、私の留学にも深く関わる点も多いものでした。今月の報告書では日本とオハイオ州の関係についてフィンドレーで学んだことをご報告させていただきます。

ーオハイオ州と日本、経済的な繋がりー

・日系企業と在留邦人

フィンドレーをはじめ、オハイオ州には多くの日系企業があり、自動車をはじめとする製造業が盛んです。2011年の総領事館のデータによるとオハイオ州内で420の日系企業の事業所があり、その59%の248か所が製造業関連の企業・工場、そのうち自動車関係の事業所数は130か所だそうです。

また、日系企業の総従業員数は約5万8千人にのぼり、うち98%が現地採用の職員と、高い現地雇用率になっています。フィンドレー大学でも「親がホンダで働いている」「昔トヨタの工場に勤めていた」という人にたくさん会いました。フィンドレー市内では日本車も多く見られ、オハイオ州の姉妹都市でもある埼玉県からは機械工学系の奨学生が留学に来ており、地域の会社でインターンシップをしています。「日系企業がオハイオ州の街を支えている」と語る人もおり、日本とオハイオ州の経済的な強い結びつきを体感しました。

Figure 1: オハイオ州内の業種別事業所数

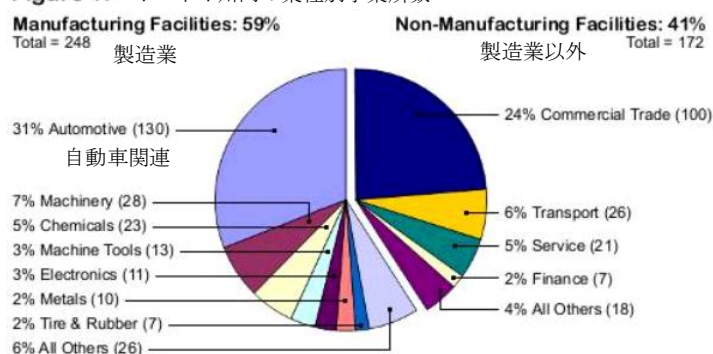
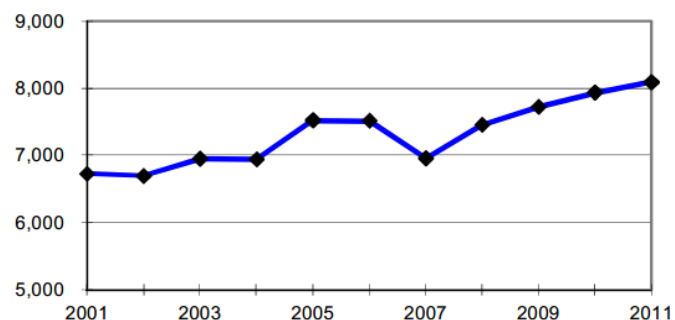


Figure 5: Japanese Population in Ohio

オハイオ州内の日本人人口



アメリカ自動車産業の中心の地でもあるデトロイトにある学校を訪問する機会をいただきました。その際にデトロイトの自動車産業とその歴史について話を聞くことができました。デトロイトへ繋がるルート75は20世紀の産業革命の発祥の地であり、かつては多くのアメリカ自動車工場が立ち並んでいたそうです。現在では日本の自動車企業が多く並んでおり、1970・80年代にアメリカで起こったオイルショックをきっかけにしたアメリカ自動車企業の衰退、日本車企業のアメリカ進出の面影が今も残っていました。



デトロイトの近くの小学校と高校を訪問する機会があり、デトロイトも案内していただきました。かつての自動車製造業の衰退をきっかけに生まれた廃墟が多かったのが印象的でした。また、廃墟や空き地を使ったアートを見ることもできました。道路や街路樹全体がアート作品になっており物語の中に入ったような不思議な空間でした。

かつての日系企業のオハイオ州への進出は、同時にたくさんの日本人とアメリカ人の交流のきっかけにもなりました。現在のオハイオ州内の在留邦人は約 8000 人で、過去 10 年間で 20% の増加と経済関係の発展とともに増え続けています。駐在員の単身赴任だけでなくオハイオ州に引っ越し数年間を過ごす家族もたくさんいることから、経済面の交流だけでなく、コミュニティ内での異文化交流の機会も生まれました。「在留邦人が現地のコミュニティで地元の人々と交流する」「日本人の子どもたちが現地の学校に通う」、そうした教育・文化的交流が自然と盛んになり、地域コミュニティの中で日本人への理解が深まったそうです。「日本企業がオハイオ州に進出し、たくさんの日本人がオハイオに住み始める。日本人と地元の人々との間に交流が生まれ、大学に日本語専攻コースができたたり日本料理店がオープンしたりする。そうした場所から人同士の交流が生まれ様々なつながり・学びの機会が生まれる。」産業的な利益が目的の海外進出から、人同士の文化的な交流が発生する過程がとてもおもしろく感じました。

フィンドレー市もそうした地域のひとつで、地域コミュニティと日本人との交流が活発な市のひとつで、**Friends of Findlay** という日系企業を中心とした団体も、フィンドレー市や地元の人々との交流を図っています。留学中もフィンドレー大学の川村先生のご紹介で地域の人々と交流する機会をたくさんいただきました。出会った人々が「日本人と話すのは初めてではないよ」と言っていたのが印象的でした。もちろんフィンドレーには日本以外の国々からもたくさんの人が来ていますが、地域の人々の間で、「日本人留学生はもちろん、たくさんの日本人が働いている」ということが広く認識されていることは新鮮な感覚でした。彼らのそうした認識が、地域の職員や店員などが持つ、私たち外国人に対するオープンな姿勢の基礎になっているのではないのかと感じました。

・教育事情プレゼンテーション ～留学生と地域の教育的交流～

教育学を専攻する学生としてフィンドレー市内の学校の校長先生や先生方に、日本の教育事情についてプレゼンテーションをする機会をいただきました。お話をいただいた時は「どうしてこのプレゼンをするのだろう」と不思議に思っていました。川村先生のお話によるとフィンドレーの先生方に日本の教育現場を体験し理解してもらうために、フィンドレーの日系企業が出資し、先生方に 10 日間の日本でのショートステイを体験していただいているそうです。この交流が始まった背景には、「フィンドレーの先生方に日本の教育について知っていただいて、フィンドレーで学ぶ子どもたちがより自分に合った教育を受けられるように、また日本に戻った際に戸惑うことが少なく済むようになれば」という思いもあったそうです。アメリカと日本の教育には異なる点もたくさんあり、両国の教職員にとっても教育についての新たな学びを得る機会になっているそうです。



ボーリンググリーン州立大学の日本語クラブのイベントに参加させていただきました。ここでも地域の人々と現地の方々との交流に感謝し、今後の発展を願うことが強調されていました。



留学中にお世話になったフィンドレーに住むご夫婦。帰国後も連絡を取り合い、いつか日本を案内する約束をしました。

先に紹介した自動車産業を中心とした経済的交流が、私のような留学生と地域の先生方との交流にも発展した人々の努力と長い時間を体感し、その繋がりの一部になれた事実にも喜びを感じました。フィンドレーが持つ日本人への慣れ親しみ・理解や、プレゼンテーションや学校訪問などの貴重な経験の機会がある地域性が、「英語を使ってたくさんのコミュニケーションをとる」という留学スタイルにぴったりのように感じました。

・これからのオハイオと日本

「当時はアメリカの企業からリストラにあった人々の日本車バッシングもあり、オハイオで暮らす日本人にとっては大変な時代だった。今では仲のいいアメリカの企業も増え、良い関係を保つことができる。」と語る日系企業の社長。「日本企業の進出で辛い思いをしたアメリカ人もいるけれど、日本企業の影響でアメリカの車もよくなった。雇用の機会もつくってくれるしありがたいことだ。」と言うフィンドレーの作業員の方。地域の企業と日本車企業の経済競争から、より良い製造業・製品、より良い関係を築くための共同作業へ。この「競争ではなく共同作業」という姿勢をたくさん目にすることができました。

デトロイト総領事館の松田総領事がある式典でお話しになった内容です。「オハイオ州政府が製造業の活性化に力を入れており、日系企業を含めた外国企業への投資も促進されつつある。また円高もあり米市場への日本からの投資が継続されることが予想されるため、オハイオ州での日系企業のさらなる発展も予想される。製造業以外でも医療・医薬分野での日本企業の活躍も期待されている。こうした経済的発展により多くの現地雇用が生まれるであろう。」こうして今後も在留邦人の数が増えていくなかで、日本とオハイオのつながりがより深まっていくのではないかと感じました。福井県のフィンドレー大学奨学生制度も継続していくなかで、福井からの奨学生がそうしたつながりの一部となり、両国間・両地域間での今よりも発展した関係に携わることを願います。私の奨学生としての任期は 5 月で終わりを迎えますが、留学が終わった後も日本とオハイオ州、福井県とフィンドレー大学、双方のより良い関係のために努力したいと感じました。



フィンドレー市制定 200 周年を記念した桜の植樹式の様子。総領事・フェル学長と（左）、

フィンドレー市長と総領事による植樹（右上）、フィンドレーで暮らす日本人中学生とフィンドレーの中学生による植樹（右下）。